

IHRA国際フォーラム2025への参加

2025年10月22日～25日

■国際高速鉄道協会（IHRA）について

一般社団法人国際高速鉄道協会（IHRA：International High-Speed Rail Association）は、東海道新幹線開業50周年を契機として2014年4月1日に設立されて以来、平面交差のない高速旅客鉄道専用の軌道とATC（自動列車制御）システムにより構成される「Crash Avoidance」（衝突回避）の原則と、システム全体を統一的に捉え、ハードとソフトを最適に統合する「Total System Approach」に基づいた「新幹線システム」が、これから高速鉄道を整備しようとする国々において正しく理解され、国際標準としてその導入が進み、世界の高速鉄道の更なる発展に寄与することを目指して活動している。

■IHRA国際フォーラム2025について

本会議は、「高速鉄道と描く未来の風景～より良い明日への架け橋～」をテーマに、東京・高輪をメイン会場として開催され、日本を含む13カ国から約300名が参加した。

3年ぶり5回目となるIHRA国際フォーラムのメイン会議（10月23日）は、全4セッションから構成されており、当研究所からはセッション2「鉄道整備と沿線都市開発の一体的推進」において、金山主席研究員が発表を行った。

◇オープニングセッション

オープニングでは、当研究所会長でもある宿利正史 IHRA 理事長による開会と歓迎の挨拶が行われた。続いて、石破茂前内閣総理大臣より「鉄道は単なる移動手段ではなく、非日常性を伴う旅であり、システムとして成り立つものである。これから先、世界に高速鉄道は広がっていくが、需要が急増するインドや東南アジアなどの成長市場では大量輸送が求められ、日本や欧州などの成熟市場では快適性や環境性能といったものが重視されるだろう」という話があり、「鉄道の持っている様々な可能性、そして夢といったものが大きく世界を変えていくことを確信している」という力強いメッセージがあった。さらに、金子恭之国土交通大臣からのメッセージが、寺田吉道国土交通審議官の代読により紹介された。



宿利 IHRA 理事長



石破前内閣総理大臣

◇セッション2 鉄道整備と沿線都市開発の一体的推進

日本、台湾およびタイにおける実例を通じて、優れた鉄道整備が都市および沿線の成長軸となる可能性を検証した。制度設計や官民連携、地域ビジョンなど、多様な視点から持続可能な都市形成について議論された。

まず、モデレーターを務めた加藤浩徳東京大学大学院工学系研究科教授より、新幹線がイノベーションに与える影響や TOD（Transit Oriented Development）の考え方について説明があった。また、深澤祐二 東日本旅客鉄道取締役会長よりエキナカ開発や TOD に関する取り組みの紹介があり、楊正君 台湾高速鉄道理事より鉄道局のもとで一体的に開発を実施した事例の紹介があった。特に、TODの原則として、Connect（接続）、Compact（コンパクト）、Transit（公共交通）、Densify（高密度化）、Shift（自動車からの転換）、Mix（複合利用）、Cycle（自転車）、Walk（徒歩）の8つの要素を考慮した新竹（Hsinchu）の駅周辺地区開発事例が紹介された。ピチェット・クナダムラクス タイ王国運輸省鉄道局長からは、JICAによる取り組みや民間と国の協力の重要性について紹介された。当研究所の主席研究員・研究統括でもある金山洋一 富山大学学術研究部都市デザイン学系特別研究教授からは、日本の TOD に関する成功事例として富山市での公共交通の活性化について紹介した。



金山主席研究員



セッション2の様子

◇クロージングセッション

クロージングセッションは、オーストラリアのダニー・ブロード 元オーストラリアン鉄道協会（ARA）会長により、各セッションが総括された。高速鉄道は、安全、速達性、快適性、信頼性といった乗客の要求を満たしていく必要があり、長期的なコミットメントを政権が持つことが高速鉄道の実現には不可欠といった話があった。